

日本とアジアの金融市場統合 — 邦銀の進出に伴うアジアの金融の深化について —

国際通貨研究所 矢口 満

国際通貨研究所 山口 綾子

京都橋大学 佐久間 浩司

過去 10 年ほどの間に、日本の民間金融機関のアジアビジネスは大きく進展し、それがアジア金融市場との相互的な発展につながってきた。本報告では、日本とアジアの金融市場の統合を、国際資本移動や金融制度といった切り口からではなく、金融機関の民間部門としての活動という切り口から議論する。特に注目したのは、銀行（邦銀）のアジア進出が加速するなかで、相対的に発達した金融技術が地場銀行に伝播し、それがアジアの金融の深化をもたらしている可能性である。

1980 年代以来の邦銀のアジアにおける活動を振り返ると、特に 2007～2008 年のグローバル経済金融危機以降、ユーロ圏の銀行の活動が消極化する一方で現地の金融ニーズが高度化するなか、与信業務などが着実に拡大してきた。とりわけ ASEAN（東南アジア諸国連合）において、邦銀はその高度化・多様化するニーズを取り込むべく、2012 年頃より地場銀行の買収や地場銀行との資本提携・業務提携を積極的に進めてきた。

その結果として、リテール・企業向け金融サービスでは、邦銀から買収先・提携先の地場銀行に向けて金融技術の波及がみられる。特にリテールでは、邦銀に買収・提携された地場銀行の国際ネットワークの中で、「金融の発達している国」から「遅れている国」へ技術の伝播が生じている。

さらに、国際金融規制や各国制度に対応した広義の経営管理のノウハウに関しては、買収により地場銀行が子会社化された場合、その銀行のレベルが一気に邦銀並みにまで引き上げられる。そして、それが現地におけるベストプラクティスとなり、金融監督当局を通じて当該国内で波及する可能性も指摘できる。

このように、邦銀の進出にはアジア現地の金融の深化に貢献する側面がある。これは、金融機関のレベルにおいて、日本とアジアの金融市場統合が徐々に進んでいる状況と位置付けられよう。